

将軍、着座す ～〈大広間〉三の間～

本年度は、寛永行幸から400年目にあたることを記念して「シリーズ寛永行幸400年」と題し、行幸時に使用された二の丸御殿の部屋の障壁画をご紹介します。二の丸庭園の南側に設けられた行幸御殿は、後水尾天皇(1596～1680)を迎えるために造営されたもので、主な行事はこの御殿を中心に行われました。一方、二の丸御殿は、〈大広間〉の南側に設けられた能舞台で上演された能の観覧席として、また、公家や門跡らへの饗応の場として用いられました。

夏期は、行幸時に将軍であった徳川三代将軍家光(1604～1651)が能観覧の際に着座した〈大広間〉三の間の障壁画を展示します。

寛永行幸と二条城

江戸時代初期、徳川家康(1543～1616)は江戸に幕府を開き、武家政権の頂点に立ちましたが、天皇は伝統的な権威を保ち続けていました。幕府は朝廷への統制を強める一方で、徳川二代将軍秀忠(1579～1632)は、元和6年(1620)に娘の和子(1607～1678)を後水尾天皇へと嫁がせます。こうした関係のもと、将軍家の招きにより後水尾天皇らが二条城を訪れたのが寛永行幸です。この行幸は、朝廷と幕府の融和および幕府の威勢を広く世に示すものでした。

この行幸の準備として、二条城は行幸御殿を新造するとともに城域を西に拡大し、本丸御殿も新たに設けました。さらに、もとあった御殿を大改装し、家光のための二の丸御殿として整えました。

寛永3年(1626)9月6日から5日間行われたこの行幸は、天皇が行幸御殿に滞在し、城内で連日、様々な催しが行われました。まず、最上級の衣装に身を包んだ約9000人の行列が御所から二条城に入り、その後は、舞や和歌、管弦や能、天守の見学などが行われました。料理や室内の設えに至るまで贅を尽くし、最上級のおもてなしをしました。江戸時代、二条城がもっとも華やいだのが、この寛永行幸でした。

将軍が座した〈大広間〉三の間

行幸4日目には、〈大広間〉南側に能舞台が設けられ、演能が行われました。現在、この能舞台は残っていませんが、絵図などから大広間の南側から約7m離れたところに北向きに設置されたことがわかっています。観覧席は、二の丸御殿の中に設けられ、天皇の席は能舞台の正面となる〈大広間〉二の間に置かれました。南側に御簾を掛け、そのそばに御座畳を敷いた茵が設けられ、天皇は大床を背景に能を觀賞しました。

一方、大御所秀忠と将軍家光の席は、三の間に置かれました。南側に御簾を掛け、席の周囲を屏風で囲い、また四の間の境にも御簾が掛けられました。三の間は、二の間にいる天皇

をもてなしながら、背後に多くの家臣が出仕することができる四の間や式台などがあり、将軍の座として適した場所でした。

こうした空間とともに注目されるのが障壁画です。寛永行幸に際して、二の丸御殿の障壁画は狩野派によって一新されました。〈大広間〉一の間から四の間には、金地に巨大な松が描かれており、松には繁栄や長寿といった吉祥の意味が込められていると考えられます。また、二の間には六羽、三の間には一羽の孔雀が描かれています。さらに、三の間と四の間の境にある欄間の三の間側には、四羽の孔雀が彫刻されており、二の間と三の間の境にある欄間の二の間側には、鳳凰が彫刻されています。孔雀や鳳凰は、縁起の良い瑞鳥とされ、天皇や将軍を迎える場にふさわしい題材であったといえるでしょう。なお、能の上演時には、一部の舞良戸などが取り外されましたが、空間全体として象徴的な構成は、保たれていました。

二の丸御殿に天皇を招いて能を鑑賞することは、徳川家の繁栄を視覚的に示すことの一つであったと考えられます。将軍は三の間に座し、二の間の天皇の様子に細やかな心配りをしていたことでしょう。最上級のおもてなしで天皇を歓待しつつ、幕府の威勢を巧みに示していたのです。

寛永行幸を伝える史料

ここまで、将軍の座した三の間について触れてきましたが、寛永行幸については、いまだ十分に研究が進んでいないといえます。

歴史的な大行事であった寛永行幸は、様々な史料によって今日に伝えられました。特に、家康の側近で寛永行幸を計画したとされる以心崇伝(1569～1633)の漢文の記録「寛永行幸記」や、「寛永行幸記絵巻」は、初期の活字印刷である古活字版で刊行され、寛永行幸の様子を伝えるだけでなく、当時の出版文化を知るうえでも重要なものです。また、「二条城行幸図屏風」は、行列の様子を視覚的に伝える貴重な資料であり、文献記録ともよく一致しています。その他にも、複数の写本や公家の日記などが残されています。さらに、家光の公式記録として後世に編纂された「大猷院殿御実紀」など、多様な形で記録が伝えられています。

しかしながら、時代が下るにつれて記述に脚色や変化が加えられていることもあります。これらの史料を比較・検証しながら、寛永行幸の実像に迫っていくことが、今後の課題といえるでしょう。

降矢淳子(元離宮二条城事務所学芸員)